

# 自虐と依存から自立へ

## ——近代の強迫的自律のパラドックス——

鎌原利成

### はじめに

現代社会は、一見、自分の欲望を自由に満たせる社会に見える。「私は、一体どう生きたらいいの?」「苦しいのだけど、どうしたらいいの?」と問うと、「他人のことなんて気にしないでいいから、自分のことは自分で決めたらいい。自分のやりたいことをやればいい。」という答えが返ってくることが多い。

しかし、「他人のことなんて……」と、答えてもらったところで、かえって戸惑ってしまい、「やっぱり、自分の本当の欲求がわからない」と、思う人がいるだろう。それどころか、自ら失敗や苦痛を求めてしまう人、自分を虐待するパートナーばかり愛し過ぎてしまう人、極端に痩せてしまう人などがある。「他人のことなんて……」と答えた人の目には、こうした人々が奇異に映るかもしれない。しかし、「他人のことなんて……」と答えた人ですら、頑張っただけで自分の生き方を生きているつもりでいて、ふと気が付くと、どうしようもない虚しさに打ちひしがれていることがあるかもしれない。「自分はなにをやっているんだ。自分は、本当に自分を生きていたのか?」と。近代の「自律」の規範自体が、「どう生きたらよいかわからない」という問いや、自虐的、マゾヒスティックと言える行動と、実は、深い関わりがあるのではないか。本稿では、自虐性・被虐性、自己破壊的依存症の問題と、近代的自己の「自律」の問題を取り上げ、一人の人間として生き生きと「自立」して生きるということはどういうことか、考えてみようというわけである。近代人を「自律」に駆り立てる欲望と、人間を存在感で満たすを生命感を区別していくのが本稿のねらいの一つだが、議論を整理する際、作田啓一の自我論を用いることにする。

## 1 近代人のダブル・バインドと自虐・依存

### 1-1 ジラールの模倣的欲望理論と依存的マゾヒズム

近代における「自律」の規範を、虚偽と見做した思想家に、R. ジラールがいる。ジラー

ルは、『欲望の現象学』において、ロマン主義的な近代人の「模倣的欲望」に関して論じた。特に、近代において、欲望の主体は、個性、自律、「主体性」<sup>1)</sup>といったロマンティズムを追及しているのだが、実は、欲望する主体は、他人の欲望を模倣しているに過ぎないという。しかも、自分が欲望のモデルにしている他人（媒体）は、同時に、欲望の充足を妨げるライバルともなる。というのは、欲望する主体は、モデルと同一物を欲望するからだ。欲望の主体は、モデルの欲望を模倣している以上、欲望充足において、欲望のモデルに「遅れ」を取っているのである。「自発的であれ」というメッセージが、欲望のモデルを通して与えられる以上、自発的であろうとすることは、もはや、欲望のモデルへの従属を意味し、自発的ではなくなっているのである。それゆえ、欲望する主体は、欲望の媒体、つまり、モデル＝ライバルに対し、崇拜と憎悪の感情を抱くのである。近代人は、「自律性」「自発性」「他者との差異」という聖なる欲望対象を求めて、人間同志が、互いが互いにとって模倣的欲望の「モデル＝ライバル」であるような競争的関係性を結んでいるのだと言えよう。誰もが、理想的な「主体」から「遅れた」状態であり、他人に「遅れ」を取っているという意識を抱いているのである。

しかし、「自律性」を求める欲望の主体は、「自尊心」「虚栄心」の持ち主でもある。それは、自分が、欲望のモデルと同一化し、理想的な「自律性」「自発性」を得られると信じているからである<sup>2)</sup>。しかし、自分が「自律的」な存在であるとの確証は、モデル＝ライバルの欲望をどれだけ模倣できているか確認することによってしか得られない、つまり、他者の承認によってしか得ることができないのである。もっと極端な言い方をすれば、「自分の『自律性』を、他者から賞賛されること」、「他者から賞賛されることそれ自体」が、欲望の対象になっているといえる。それゆえ、「自尊心」「虚栄心」の持ち主は、自分の「自律性」を他者に誇りたいのに、他人の評価に依存しなければならないジレンマに、葛藤するのである。模倣的欲望の主体としての近代人を、簡単に言い表すと、

「『今、ここ』で『神』（自律的存在）でない自分を卑下して、モデルの神性をとおして、未来における自己の神性を欲望する自分に執着し、『自尊心』を持つ。——そして、それは、更に他者の欲望の模倣、他者への依存をもたらす。」ということになる。

では、最初は模倣的欲望を抱いていたとしても、自分がモデル＝ライバルに勝って、欲望対象を勝ち取ればよいのだとは、言えないか？ だが、モデル＝ライバルに勝ってしまうことは、逆に失敗感をもたらすのである。模倣的欲望の主体にとって、自らの欲望対象の価値は、主体と、欲望の媒体（モデル＝ライバル）の距離、すなわち、媒体が主体に加える抵抗によって決まるからだ。媒体の抵抗は、媒体の優越性の確証であり、主体は、欲

望充足に失敗すればするほど、自分の欲望をますます加速させるのである。つまり、模倣的欲望は、本源的に充足不可能なのである。ジラールは、マゾヒズムについて、以上のような説明をするが、これを本稿では、「依存的マゾヒズム」と呼びたい。依存的マゾヒストは、欲望の媒体の神性を通じて、自己の神性を横取りしようとはしていても、自分自身では、成功に値しないと、自分を軽蔑している。その結果、「マゾヒストは自分にたいして愛情や優しさを感じずるような人間たちから顔をそむけ」（ジラール、1961=1971、202頁）、「媒体＝障害」であるようなパートナーを求めるのである。

### 1-2 共依存と嗜癖<sup>3)</sup>

こうした関係性は、「共依存(codependence)」と呼ばれている関係性として、最近注目されるようになってきた。共依存とは、1980年代初めにアルコール医療の臨床現場で生まれた言葉である。その典型的なものは、アルコール依存症の夫と、その夫から離れられない妻の関係である。アルコール依存症者の妻は、夫の飲酒を支える「支え手(enabler)」、アルコール依存症者の「共依存者」と呼ばれる。アルコール依存症者の配偶者は、「酒さえ止めたらこの人はいい人なのに……」とか、「こんな暴力的な夫との生活は耐えられない」と言ったりしながらも、自分の欲求充足、幸福を忘れ、夫の飲酒をやめさせようと必死になる。だが、それは、自分の自己評価の低さ故に、夫を支配、コントロールすることである。夫は夫で、妻の共依存的支配が嫌で、更に飲酒を続けたり、妻を暴力的に支配しようとするのだ。こうした共依存者の特徴は、「他の人びとの行動や欲求をとおして自己のアイデンティティを見いだすことが習慣化して」（ギデンズ、1992=1995、140頁）おり、自己評価が低く、他者から拒絶されることを極度に恐れることである。そして、共依存者は、「他人の世話をすることを欲しながら、無意識のレベルでは、その献身が裏切られることを期待し」（野口、1995、31頁）、裏切られの反復をするのである。

共依存の問題は、もともとアルコール依存症の問題に取り組む中で注目されてきたものであるが、実は、共依存のような依存的人間関係、人間関係嗜癖（relationship addiction）こそ一次的嗜癖であって、アルコール、薬物依存症などの「物質嗜癖（substance addiction）」、ワーカホリズムなどの「過程嗜癖（process addiction）」といった二次的嗜癖の根本にあると言われている<sup>4)</sup>。模倣的欲望に基づいた競争的＝依存的人間関係しか築けない「寂しさ」から、人は共依存、人間関係嗜癖に陥ると言われるが、同時に、共依存、人間関係嗜癖それ自体が、「親密性からの逃走」（A. W. Scheaf）なのである。同様に、他の嗜癖も、人間関係における寂しさが根本にあって、かつ、それ自体、ジラールの依存的マゾヒズムのような「親密性からの逃走」のメカニズムなのである。例えば、共依存も含め、あらゆる嗜癖は、「意志の病」と言われているが、それはジラール

的な意味での、「[自律性]を求める[自尊心][虚栄心]の病」と言い換えてもよい。アルコール依存症者は、「意志の力で酒をやめろ」というメッセージを、常に自分に与え、かつ、他人から与えられ続けている。すると、アルコール依存症者は、酒を少し飲んでも耽溺、連続飲酒に陥らない「意志の強さ」を示すために、かえって、「一杯のリスク」に挑戦するのである。そこで失敗したところで、その失敗を帳消しにし、「意志の強さ」を示すために、アルコール依存症者は、ますます、より厳しい「障害」としての酒に挑戦し続けるのである<sup>5)</sup>。しかし、これは、アルコール依存症者にとっては、「宇宙が自分を憎んでいることを証明するプロジェクト」(ベイトソン、1972=1987、下462頁)であり、依存症者は、マゾヒスティックに、酒に負け続けるのである。こうした状況に嗜癖し、周囲の者を共依存関係に巻き込むことで、アルコール依存症者は、寂しさを埋めようとしつつ、他者との対等で親密な関係性から逃げるのである。

### 1-3 「嗜癖する社会」における非生命性

こうした模倣的欲望、依存的マゾヒズムの行き着く先は、「最終的には無機物的な、空虚な冷たさ」(ジラール、1978=1983、656頁)、非生命性、自己破壊である。模倣的欲望の主体は、「欲望=奴隷化」と「欲望自体の放棄=非奴隷化」の葛藤を、「感覚の麻痺、生の好奇心の全面的、部分的喪失」によって解消しようとする。すると、「根元的禁欲のはてに、……虚無を崇拜の対象そのものに仕立てる」(ジラール、1961=1971、302頁)ことが、究極の自尊心の拠り所となるのである。「欲望の全的不在、完璧な無感動、心情と知性の欠落」(同、313頁)した媒体は、欲望する主体にとって、自分を軽蔑する媒体以上にどっしりして欲望を誘発し、欲望する主体自身の実存を根源的に否定するような障害になるのだ。というのは、虚無そのもので無執着・無関心の媒体は、模倣的欲望の主体にとっては、欲望の「対象を十分に所有している」(大澤、1991、43頁)ように映るからである。ドストエフスキーの『悪霊』の登場人物キリーロフは、神への依存からの解放を目指して、自らの虚無を崇め、自尊心から自殺しようとした。このように、模倣的欲望、自己神格化の帰結は、「神性の本質を、自己自身の実存を根源的に否定するものの中に、言いかえれば生命のないものの中に、さがそうとすること」(同、317頁)、自己破壊である。しかし、こうした非生命性は、「自律性」を模倣的に欲望する近代社会の帰結であるというだけではない。そもそも、近代合理主義自体が、非生命的なのではないのか? ここで、ホルクハイマー=アドルノの『啓蒙の弁証法』におけるサディズム論などを参照しつつ、非生命性、純粋な抽象性、合理性について簡単に述べておきたい。

啓蒙とは、他人の指導を受けなければ自分の悟性を使用できないような童蒙状態から抜け出すことである(ホルクハイマー=アドルノ、1947=1990、127頁)。ここで言うサディ

ズムとは、加虐的異常性愛という通俗の意味ではなく、むしろ合理的支配という面で捉えられている。啓蒙においては、自然から学び、自然を支配する技術の獲得が目指され、計算可能性、有用性という基準における「思考」や、啓蒙の道具としての思考の抽象作用（数学的思考）が重視される。その結果、情念は「自然」として貶められ、個々の対象の質的なものは、清算されてしまい、思考自身が道具化してしまうのである（同、訳注、181頁）。サド的加虐性は、啓蒙、近代化が追及した「目的志向性」「自己同一性」——不断に自己を克服する自己——の究極の姿を表していると言ってよいだろう。だが、それは、自己懲罰的であり、母親と結合したい欲望の否定<sup>6)</sup>、ひいては生命性の否定でもある。こうしたサディスティックな規範が「倒錯的」であるのは、理性の形式化、思考の抽象化、手段の物神化によって、「道徳的無感動」<sup>7)</sup>がもたらされ、「不正や憎悪や破壊でさえ経営作業にな」（同、156-157頁）り、理性が殺人に対して原則的反論をすることができなくなったからである。自然や生命を、「非生命=物」として支配するような規範が頂点にある近現代社会を、A. W. シェフは、「嗜癖システム」と名付けている。共依存関係は、自己や他者を支配—被支配の対象にすること、言わば、人間を「物」化することである。つまり、「嗜癖システム」においては、人間の感情に支配が及び、生き生きとした感情が否認されるのである。そこで最も根本的な嗜癖は、「無力と非生命性」に対する嗜癖とも言える。「無力と非生命性」に嗜癖しているから、人は強烈な刺激を求めて嗜癖し、かつ、感情を凍結させるために嗜癖するのである（シェフ、1987=1993、130-131頁）。

## 2 近代的自己の限界と身体の可能性

前節で述べたように、特に近代社会の超越的規範は、非生命性を志向する自己懲罰的、自己否定的なものである。こうしたサディスティックな実践は、「身体を否定する最も端的な方法」（大澤、1990、353頁）である。しかし、身体は、単に否定されるだけで終わるのだろうか？ 身体の可能性、近代を超える可能性について、この章で概観してみよう。

### 2-1 摂食障害と身体 —— 身体の二面性 ——

ここで、「身体」について、簡単に整理しておこう。身体とは、規範によって様々な「意味」を付与され、自己のアイデンティティを担う存在である<sup>8)</sup>。一方、身体とは、肉体的欲望が沸き起こり、直接的な身体経験をする存在でもある。パウマイスターによれば、近代的自己にとって、自分のアイデンティティなど、自己が担う「意味」は重荷になる。そこで、近代的自己は、自己の「意味」の重荷から逃避するために、「痛み」「酩酊」などの直接的な身体経験を「今、ここ」で体験することによって、自己の「意味」を縮減するの

である。身体経験に集中している時は、自己の「意味」をわざわざ考えないで済むのである。精神的に自己の「意味」やアイデンティティがどんなに混乱し、どんなに無意味に思えたりしても、身体は、否応なく、「今、ここ」に、現に一つの存在として在り、究極的に、自己アイデンティティの、最小の、最後の根拠になり得るといっているのである。

ここで、摂食障害、まずは、拒食症について取り上げよう。女性が拒食症になるのは「やせ規範」「やせ願望」による、過剰なダイエットなどによることが多い。過度に痩せた身体を追及する女性には、「空気のように透明になりたい」とか、「肉体はいらない」という人が目立つ。つまり、身体は、排除の対象となっているのだ。しかし、「痩せたい」ということは、自分を「美しく見せたい」という願望の現れでもある。拒食症者にとっての身体は、「欲求の存在とこだわりを表すもの」(オーバック、1986=1992、218頁)である。拒食症者にとって、排除の対象となっているのが、「予測できない欲求の出現の場」としての身体であり、「こだわり」の対象となっているのが、表現手段の媒体としての身体である。コントロール不能な欲求に対する不安、痩せなければ他人も自分も、自己を受け入れられないという不安、この二重の不安から、身体は、拒食というコントロールの対象となるのである。こうした操作の対象としての身体を、オーバックは、「偽りの身体」と呼ぶ。苛酷なダイエット、エクササイズの達成感、<sup>9)</sup>「偽りの身体」の獲得によって自らの「意志の力」(プライド)を確証することである。と同時に、それは、意味を超えた「身体的直接経験」の場としての身体、「生きている」身体を苦痛によって逆説的に実感することである。それは、「この苦痛を生きているのは、ほかならぬこの<私>である」という、<個>の自覚でもある<sup>10)</sup>。しかし、それだけではなく、空腹の地獄は「足かせとなる情緒的な重荷つまり良心がうすらぐ」感覚をもたらす。つまり、食べないでいる間は、自分の行為に関する罪の意識——「食べる資格」がないという感覚——が食に関することに集中し、良心は敗北しているのだ(クリスプ、1980=1985、272頁)。つまり、拒食症はダイエットの犠牲というだけではなく、オーバックの言うように、「抵抗」<sup>11)</sup>の形態でもある。このように、近代社会をもたらした「禁欲」の規範や、自然、生命に対するサディスティックな支配は、それ自体が、規範に対する「抵抗」を生み出すのだ。拒食症は、多くの場合、過食、過食嘔吐につながるのだが、それは、まさに「食欲」という自然な欲求に対するコントロールの限界、人間が「食欲」という本能を受け入れざるを得ないことを示す。しかし、摂食障害はそれ自体、嗜癖としての側面もち、先にアルコール依存症について述べたように、「意志の力」によるコントロールの病でもある。拒食、または過食によって、罪悪感を敗北に追い込んだとしても、すぐさま、罪悪感が襲ってきて、拒食、過食嘔吐などによって、再び身体をコントロールするのである。このように、摂食障害は、近代的な「自然、身体への支配」の規範そのものである面と、近代への抵抗、近代を超え

る可能性を有するのである。

## 2-2 欲望の回復としての契約的マゾヒズム

### —— ドゥルーズのマゾヒズム論 ——

本節でも、近代的なサディスティックな規範の帰結であり、かつそれを超える現象を取り上げる。それは、ザッヘル＝マゾッホ<sup>12)</sup>が自ら体験し、小説に著したようなマゾヒズムである。本稿では、マゾッホ的なマゾヒズムを、「契約的マゾヒズム」と呼ぶことにする。というのは、ジラルールが論じた依存的マゾヒズムは、「意図せざる結果」としてのマゾヒズムであったのに対し、マゾッホ的マゾヒズムは、マゾヒストの男が、女性と契約を結び、その女性を訓育して、自分の理想の拷問者に仕立て上げるからである。それは、制度的な支配関係に拘束されず、快楽を得るために力の格差を戦略的に利用することであり、「意図された自由の術」（ハルプリン、1995＝1997、125、162頁）と言える。しかも、拷問者にさせられる女性は、決してサディスティックな女性ではなく、欲望を禁止する機能を失った存在である<sup>13)</sup>。こうして、マゾヒストが結んだ契約は、犠牲者の「空想」的欲求を肯定するものとしての法＝規範となるのである。なぜ、「空想」か？ 現実の「否認」か？ これこそが、契約的マゾヒズムの特徴なのであるが、法＝規範とは、そもそも欲望の禁止をするものであり、精神分析の概念で言えば、「超自我」の機能なのである。しかし、前章で述べた近代的な非生命的志向の規範は、父権的な超自我の機能が極端になったものであるが、そうしたサディスティックな規範が、究極において形式化し、自己破綻したら、超自我はもはや規範を担えない。そこで、「拷問する女性」という、超自我を偽装した存在が規範を担うことになるのだが、それは、父権的、自己懲罰的規範が支配する現実の「否認」＝「空想」である。契約的マゾヒズムにおける懲罰は、マゾヒストの中の父性、超自我に対して与えられる懲罰である。マゾヒストは、快楽充足に先だって、苦痛、処罰を予期する。それゆえ、マゾヒストは、苦痛、処罰を受けることによって、快楽の到来を可能にするのである。注意すべきことは、決して、苦痛そのものが快楽ではないことである。これは、近代的自己が、「自律的になりたい」と欲望して、決して、理想的な「自律性」に到達できない、強迫的でアイロニカルな状態とは異なる、ユーモラスなものである。父権的なサディストが欲望否定的な超自我に対応するのに対し、契約的マゾヒズムにおける「拷問する女性」には、母親と結合したい欲望を肯定する「理想（自）我」に対応する（作田、1995、120-126頁）。

ここで、身体について言及すると、ドゥルーズ＝ガタリは、マゾヒズムにおける身体を「器官なき身体」だと言う。「器官なき身体」とは、超自我による欲望の禁止、意味付けを取りはらった後に残る純粋な身体性で、欲望の存立平面である。しかし、ここで言う欲

望とは、ジラールの模倣的欲望ではなく、エディプス・コンプレックスに歪められる以前の「欲望の流れそのもの」である。よって、ドゥルーズ的な意味でのマゾヒズムは、より根源的な欲望、本源的な身体性、「存在そのもの」の次元に至ることである<sup>14) 15)</sup>。

### 2-3 「底突き」と回心

今度は、前章の最初に述べたジラールの模倣的欲望、依存的マゾヒズムの帰結と、そこからの転換について述べておきたい。嗜癖からの回復に関して、「どん底」を体験すること＝「底突き」の重要性がしばしば説かれるが、ジラールも、模倣的欲望からの転換の契機としての「底突き」について述べている。模倣的欲望の帰結は、死、非生命、自己破壊であるが、そこで、模倣的欲望の主体は死に瀕して、「自己の絶望と自己の虚無を真正面に見つめ」ることによって、「形而上的欲望（模倣的欲望）」「神性の断念」「自尊心の放棄」をするのである（ジラール、1961=1971、326頁）。それは、他人に「モデル＝ライバル」としての超越性を求めるのではなく、神（キリスト）の超越性<sup>16)</sup>に委ねることである。この時、欲望の主体は、模倣的欲望ではなく、「情熱」「自己自身による欲望」を獲得しているのである。そして、自己自身に深く入り込むことと同様、他者についての認識、共感を得るようになるのだという（同、330頁）。作田啓一は、ドストエフスキーの『永遠の夫』におけるヴェリチャーニノフとトルソーツキーの関係について、「二人の人物が相互に相手に執着し、彼らの欲望がもはや誰の欲望なのかわからなくなってしまうほど、自己と他者の融合が起こ」（作田、1981、52頁）と述べる。これは、「自尊心が極限へ向かう方向において生じる」融合であって、「自尊心の否定によって生じる愛の融合とはまったく別の」、「憎しみの融合」である（同、52頁）。しかし、実は、「愛の融合」も「自尊心による憎しみの融合」も両極において一致しているのである。「限界を知らない自尊心に苦しんだ者こそ、自尊心の放棄による愛の融合をしんそこから求めるようになり、そしてこの希求の強さのゆえに、影の形で実感した融合を光のもとで実感しうる可能性が開ける」（同、52頁）のである。

こうした回心の体験は、ベイトソンの学習理論における、「学習Ⅲ」に相当するものである。ここでベイトソンの学習理論について詳述する余裕はないが、簡単に言えば、学習Ⅱとは、「パターン化された世界解釈の仕方」であり、「自分であるところのものは、学習Ⅱの産物であり、寄せ集め」（ベイトソン、1972=1987、下404頁）なのである。学習Ⅲとは、学習Ⅱで獲得された「習慣からの束縛の解放」「“自己”というものの根本的な組み換えを伴う」（同、433頁）ものである。学習Ⅲは、人間存在についてのある種の洞察、霊的成長、宗教的転換、悟りに通じるものである。学習Ⅲが達成されたら「個人アイデンティティーがすべての関係的プロセスの中へ溶出した世界」「大洋的感觉」が体験される



のである。これは、まさに自己と他者、外界との境界の喪失、忘我の体験、つまり、作田啓一の言う「溶解体験」である。ここでは、学習Ⅱで身に着けた自己を、模倣的欲望の主体（または嗜癖的・共依存的人格）とすれば、学習Ⅲは、模倣的欲望の放棄における回心だと言える<sup>17)</sup>。

織田年和は、「ある精神状態から別のより高い精神状態へ移行すること」を回心と呼んでいるが、ジラールが記述したこうした体験を、ペイトソンの学習Ⅲ、回心とみなして差支えないであろう。織田年和は、W. ジェームズに従い回心の特徴として、1) 至福感、2) 「今まで知らなかった真理を悟ったという感じ」、3) 「あらゆるものが新しく見え、美化される点」を挙げている。但し、「回心の本質をなすものは2)」であり、1)と3)は回心の結果として生じるものもしくは回心の予兆であって、回心そのものではなく、むしろ溶解体験に属するとみなすべき（織田、1990、31-32頁）だという。溶解体験とは、自己と他者、外界との境界の喪失、忘我の体験のことであり、回心と親和的であるが、必ずしも同一ではない。回心に至らない溶解体験においては、その体験が終ってみれば、もとの自我に戻っているだけである。もっと悲劇的な場合には、V. ウルフのように、溶解体験（神秘体験）の意味付けができず、かえって生の無意味さ、虚無感に満たされ、自殺に至ることもある。やはり、溶解体験を回心とするには、「溶解体験の意味付け、知的問いかけ」（織田、1990、40頁）が不可欠なのである。そして、「溶解体験によって体験した超越的存在に対する祈り、謙虚さ」も必要であろう。

こうした回心へのプロセスを具体的に実践しているのが、嗜癖からの回復を目指す自助グループである。ここでは、その起源であるアルコール依存症者の自助グループ、AA (Alcoholics Anonymous) について簡単に述べておきたい。AA には、図表のように、「12ステップ」と「12の伝統」がある。12ステップの、第1～3ステップで、酒を制御する「意志の力」「プライド」の限界を知り、自らの無力を認め、自己を「神＝ハイヤー・パワー」に委ねることが説かれている。そして、第11～12ステップで、「神との意識的触れ合い」「霊的目覚め」<sup>18)</sup>が目指されている。ここで言う、「霊的目覚め」は、回心（学習Ⅲ）と言ってよいだろう。こうして霊的成長のステップは、アルコール依存症者の仲間同士が、一人一人、無名のアルコホリックとして、ミーティングで自らの体験、思いを語り、仲間の語りにも共感することで、自らを、個を超えた全体（AA全体）の中の一人と自覚することによって達成される。アルコール依存症者にとって、対人関係は、競争的關係、共依存的關係であった。しかし、アルコール依存症者は、本当は、他者との共感を求めているのではないだろうか。しかし、自らのアルコールに対する無力を知ってゆくことで、ようやく、仲間との共感が深まるのである。これは、生命ある溶解体験と言ってよいだろう。「神＝ハイヤー・パワー」とは、そうした溶解体験の意味付け、名前と言ってよいだろう<sup>19)</sup>。

### 3 生命性を回復する自己

#### 3-1 自我の三側面 —— 独立我、社会我、超個体我 ——

ここで、今まで論じてきたことを、作田啓一の自我論を用いて整理しよう。作田啓一は、人間の自我には「独立我」「社会我」「超個体我」の三つの側面があるとする。独立我は、母子一体の状態を脱して独り立ちし、自己の現状を超えていこうとする側面である。独立我がある年齢になって出現すると、図のように横に二つの自我が出てくる。それが、超個体我、社会我である。まず、超個体我とは、「溶解体験」を司る自我で、対象中心的認識を特徴とする。「対象中心的な愛とは自他の境界の不在ゆえに自己の全体と他者の全体とが相互にいり組み合う関係」で、「その関係の中で人は他者の全体を了解することができる」（作田、1993、91頁）のである。超個体我は、他者との、このような「共感」によって、生命感、存在感の充溢感を得るのである。これは、「今、ここ」における、時間を超えた体験である<sup>20)</sup>。一方、社会我は、「拡大体験」を司る自我である。拡大体験とは、自己の範囲、境界が集団の範囲まで拡大する体験であるが、自他の壁がなくなるわけではないから、溶解体験とは区別される。社会我の特徴として、「自己防衛機能」、「自己と外界のあいだに壁をつくって自我を保存しようとする傾向」（作田、1995、114頁）などが挙げられる。そして、自己中心的に、他者、外界を、自己の利益のための道具、客体として利用することも、社会我の特徴である。しかし、「自分の周囲の壁が、家族、会社、国などの範囲に広がって「私たち」という共同体が成立し、その範囲の中で自他が結合するという側面もある」（同、115頁）のである。

ここで説明した溶解体験（超個体我）も、拡大体験（社会我）も、欲望肯定的な「プラス」の体験であるが、実は欲望否定的な「マイナス」の溶解体験（超個体我）、拡大体験（社会我）も存在する。ここで、図1~4を見てみよう、図の中心に独立我があり、独立我の両極には、ドゥルーズの「マゾッホとサド」における、欲望充足を否定するサディズムの「超自我」と、欲望充足を肯定する契約的マゾヒズムの「理想（自）我」がある。今度は、超個体我、図1の第IV象限、第III象限を見てみよう。第IV象限は、「エロス」「プラスの超個体我」の領域で、「生命ある生きた宇宙（自然）」への溶解体験がなされる領域である。第III象限は、「タナトス」<sup>21)</sup>「マイナスの超個体我」の領域であり、そこでは、「生命のない死んだ宇宙（自然）」への溶解体験がなされるのである。作田啓一は、「マイナスの溶解体験」を、「自分が統一性を失って、生命のない粉末となって宇宙に飛散する」（同、130頁）イメージで捉えているが、それは、「虚無そのもの」に浸される体験と言ってよいだろう。では、次に、社会我の領域、図の第I象限、第II象限に目を向けてみよう。作田啓一は、この領域について多くを語っていない<sup>22)</sup>。しかし、自分が、自己境界、

自己を含んだ集団の境界の内部にいる状態——例えば、集団がまとまっている中、自分も集団に適応して高揚感を味わっている状態など——が、第Ⅰ象限の「プラスの拡大体験」であり、自分が、自己、自己を含んだ集団の内部にいられない状態（不適応していたり、劣位な立場にいるなど）を、第Ⅱ象限、「マイナスの拡大体験」と捉えておこう。ところで、岡崎宏樹によれば、ジラルの供犠論における、生け贄殺害の際の全員一致の現象は「（プラスの）拡大体験」である。しかし、集団のレベルだけでなく、ジラルの欲望の模倣理論における個人間の関係も、社会我による拡大体験だと考えたい。模倣的欲望の主体が、欲望の媒体の「モデル」の側面に一致して、自尊心に満ちている状態は、第Ⅱ象限で表される。一方、模倣的欲望の主体が、欲望の媒体の「ライバル」の側面と相対的に関わっていて、劣等感、媒体への憎悪を抱いている状態は、第Ⅱ象限で表される。

以上、超個体我の体験（溶解体験）と社会我の体験（拡大体験）は、互いに区別されるものであるが、両者は、「ともに個人の限界を超えるという共通点をもっているから、一方から他方への横滑りが起きやすいことも事実」（作田、1995、ii頁）である。

### 3-2 タナトスからエロスへ —— 近代から超近代へ ——

では、作田啓一の自我論を用いて、近代社会、近代を超える可能性について簡単にまとめてみたい。

近代社会は、本質的に、図で言えば第Ⅲ象限、「マイナスの超個体我＝タナトス」がベースにある社会である。アドルノ＝ホルクハイマーや大澤真幸は、抽象的な形式合理主義の極限としての「サディスティックな超自我」こそ、近代社会における究極的な規範だと言っている。こうした超自我、規範に媒介されて、強迫的に生きるところが、近代の「非生命性」である。それは、即ち、模倣的欲望、社会我の次元にエネルギーが過剰に注がれることと同値である。近代人は、「タナトス」「非生命性」の「空虚感」を根底に感じながら、それを「自尊心」で埋めようと図の第Ⅰ象限、「プラスの拡大体験」、欲望のモデルの模倣、自己・他者の支配を志向する。だが、結局、近代人は、アルコール依存症の夫とその妻の共依存関係のように、第Ⅰ象限と、第Ⅱ象限の間を、支配—被支配のシーソーゲームをしたり、夫から虐待され続ける女性のように、依存的マゾヒズム（第Ⅱ象限）に陥ったりしてしまうのである<sup>23)</sup>。しかも、模倣的欲望は、ダブル・バインド的であるため、「存在論的不安定」＝「非生命性」をますます強めることになる<sup>24)</sup>。その結果、ジラルが述べたように、模倣的欲望は、「空虚そのもの」「非生命」そのものを欲望するようになる。それは、近代の本質、即ち、「タナトス」を欲望することそのものである。

しかし、前章で見た通り、このように近代の本質＝「タナトス」「非生命性」が露になること、それは、「タナトス」を司るサディスティックな規範が、規範として無効化する

ことである。その帰結として、契約的マゾヒズムにおける「エロス」「生命性」の優位が達成されるのだ。また、嗜癖者、共依存者（模倣的欲望の主体）が「底突き」して、嗜癖、共依存の根本にある「タナトス」「非生命」に直面した時、自分が「生命ある存在として生きたい」と真に願うならば、サディスティックな規範がもはや無効であることを知る。つまり、「底突き」によって近代人は、自らの生を、「自分の生命そのもの＝エロス」「プラスの超個体我」に委ねるのである。こうして、近代を超えることは、規範の根本が、第Ⅲ象限から第Ⅳ象限にシフトし、欲望肯定的な「理想（自）我」が欲望否定的な「超自我」にとって変わることである。しかし、マゾヒズムの元祖、ザッヘル＝マゾッホは、最終的にマゾヒズムにも限界を感じて、マゾヒスティックでない男女関係を結ぶに至った。また、嗜癖からの回復者が、現実の社会生活を営む場合、社会は依然として「嗜癖する社会」である。では、そこで、いかに生きていくのか？

ここで、摂食障害、特に拒食症に注目してみよう。拒食症も含めて、摂食障害には嗜癖としての側面もあるのだが、次のような側面も見出される。それは、近代的サディズム（「自律しろ、禁欲しろ」という規範）と、超近代的マゾヒズム（苛酷な身体経験によって「良心、罪悪感」を敗北させること、欲望を肯定すること）の両極の葛藤である。拒食から、拒食と過食のサイクル、過食嘔吐に入った場合などは特に、この葛藤が顕著になると言えよう。「欲望をコントロールできて男性と張り合える『自律的』女性であれ」「男性に従属し、『女らしく』あれ（『共依存的』であれ）」というそれ自体ダブル・バインド的な規範と、「食べたい、そして、（自らを）生かす女性でいたい」という自然な欲求との激しい葛藤が、症状となって現れているのである。次章では、こうした自己の分裂、葛藤が、いかに「統合」されていくか、「統合」とはいかなることか、ということについて述べたい。

#### 4 生命性ある個人の「自立」と成長に向けて

以上、概観してきたように、「自律しろ、自律しろ」と、自らを強迫的に駆り立て、完全な「自律」<sup>25)</sup>を実現できない自己を懲罰する超自我と一体化しようとすることは、社会我による依存関係をもたらす。本論では、このように主に社会我の次元におけるパラドックス、模倣的欲望のパラドックスについて概観してきた訳であるが、実は超個体我の次元における「自律」についてのパラドックスも存在するのだ。これは、社会我の次元におけるパラドックス以上に根本的である。

前章まで、生命感ある溶解体験の意義を述べてきたが、それだけでは、「超越的存在に呑み込まれてしまうという意味で、むしろ自律性の放棄につながる」（同、90-91頁）の

だ。先に挙げた V. ウルフの神秘体験が、彼女に自律ではなく、自殺をもたらしたことが、一つの典型例である。これは、生命の溢れる溶解体験が「空虚感」に陥った例だ。また、バタイユ<sup>26)</sup>が、「供犠的身体毀損とヴァン・ゴッホの切られた耳」において挙げているいくつかの例も、人間が神秘体験、超越的存在に呑み込まれてしまう例だと言って良いだろう。バタイユは、キュベレー（大地の女神）の祭司たちが、入信式において興奮の最中に剃刀や貝や火打ち石を用いて自分の男根を生贄にしてしまうことなどを挙げている。これは、陶酔（生命に満ちた溶解体験）の中での自己毀損（極端な場合は「死」）に至った例だと言える。バタイユはこうした自己毀損について、「供犠を行なうものは自由である」（バタイユ、1986=1974、173頁）と言っているのだが、確かに、超越的存在とつながって「自由」は得られても、それは、もはや「死」と言ってもよいものであって、生きて自律することができなくなっているのだ。

また、社会我と超個体我の間にも、パラドキシカルな関係性があるということは、ここまで述べてきた通りである。社会我の次元における模倣的欲望、自尊心の極限の「絶望」において、回心とも言うべき溶解体験が起こること。逆に超個体我の次元の溶解体験に執着するあまり、神秘宗教が単なる宗教嗜癖に墮してしまうこと、宗教共同体のカルト化などが挙げられる。

では、われわれは、このようなパラドックス、ダブル・バインドから自由になれないのだろうか？ ベイトソンの言う学習Ⅲは、その達成自体困難であり、失敗すれば精神病に陥る危険があるという（ベイトソン、1972=1987、436頁）。もはや、われわれは、こうしたパラドックス、ダブル・バインドを根源的なものと見做し、パラドックスと折り合って生きるほかないのではないか。完全に他者と共感し合えることもなければ、共依存的関係性から自由になれるわけでもないのだ。

しかし、もちろん、このようなパラドックスに陥りっぱなしでは、人間は個人として存在することはできないだろう。作田啓一は、自然など世俗外の超越的存在と交わり、生命力の充足と自己の尊厳を得ることが、個人成立の十分条件だと述べている。一旦世俗外で「世俗外個人」となってから、世俗内に移行し、世俗性（ホーリズム・共依存的関係性）に対して自らの同一性を維持し、自律的となること。これが、世俗内個人＝個人なのだという（作田、1996、108頁）。ただ、注意しておくべきは、なぜ、超越的存在との交流が、個人としての尊厳の十分条件となるかである。それは、その時、人間が、「衣拭すべき自己がなんら頼りになるものではなく、自己を超えた大きな力＝「自然」によって動かされている」（作田、1996、90頁）という「孤独」を知るからである。それは、近代人が主体的に自己準拠的に生きることの「寂しさ」以上の感覚である。この孤独感を受け入れることこそ、人間が、共依存的人間関係や、超越的存在、宇宙、自然に呑み込まれず、個人と

して存在するために必要な尊厳を与えるのである。

ここで、図1～4を見てみると、中心に「独立我」がある。独立我が図の中心に位置することは、単に、超個体我と社会我のバランスが取れた状態、超自我と理想自我のバランスが取れた状態を表わすのではなく、それは、人間がもつ様々なパラドックス、ダブル・バインドの本源性を悟り、パラドックスとつきあいながら生きる状態のことだとさえ言うてよいのではないだろうか。こうして自己の全体性を捉えて生きることは、「ひとりで生きねばならない」（自律）ではなく、「ひとりでいられて、自分のために生きていける」（自立）ということにつながってくるのではないか。それは、人間存在のパラドックス性を認識しつつも強迫的でなく、自分の生命の流れ、存在感を感じながら生きていくことである。

こうした生き方を表わすキーワードとして、私は、「いいかげんに生きよう」という言葉を想起する。「いいかげんに生きよう」というのは、摂食障害者の自助グループNABA（表7参照）のモットーであり、それは、「とりあえず、今、自分がしていることを受けいれる」、「食べたかったら、食べればよい。……すべて今のあなたが自分にとって必要と判断してやっていることなのだから」（斎藤、1993、232頁）ということだ。心の中の「懲罰的な監視者の声」——摂食障害者を罪悪感で満たし、拒食・過食に追い込む声——を聞かず、身体が発する自然なメッセージ、生命の流れに対する感受性を働かせるのである。それこそが、「嗜癖システム（白人男性システム）」に代わるものにつながるのだ。A.W.シェフは、それを、「生存過程システム（新たな女性システム=emerging female system）」（シェフ、1987=1993）と呼ぶ。それは、自分自身の視点を大切に、生命を維持し育む女性のシステムで、「自分の内部に沸き上がる感情や欲求を大切にしつつも、深いところで他人と調和する」（斎藤学）（シェフ、1987=1993、xviii頁）システムなのだ。

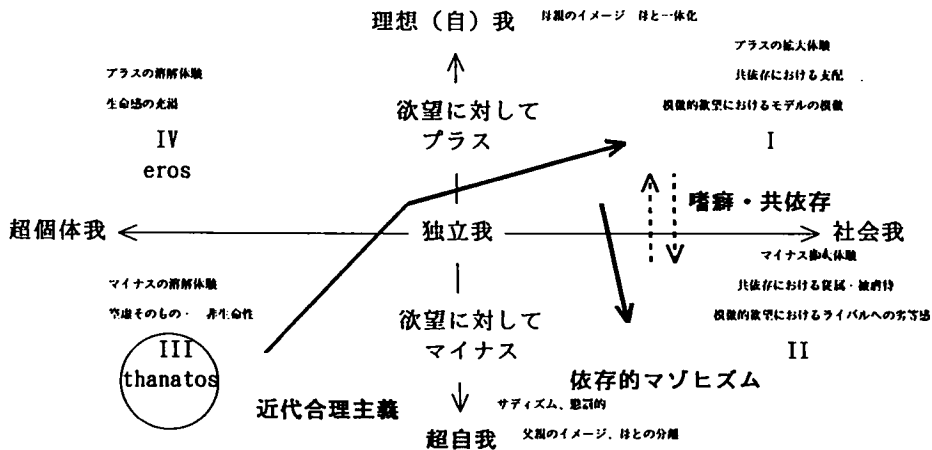
しかし、ここで、「いいかげんに生きよう」などというモットーは、単なる「甘え」ではないのか？ このモットー自体が、強迫的な規範になってしまうおそれはないのか？ という疑問が出てくるだろう。確かに、このモットーが、強迫的な規範となってしまう可能性はある。このモットーが強迫的な規範にならずにすむとすれば、それは、「仲間が生きて、存在していることそのものが、自分の存在を支えてくれている。仲間の存在自体が、温かいものとして感じられる」という共感があるからなのだ。また、このモットーが、摂食障害者の回復・成長につながっているとすれば、「おたがい一緒に成長して幸せになろうね」という、メタ・メッセージが共有されているからなのだ。「ありのままでもいいんだよ」というメッセージだからこそ、お互いの成長を願うメタ・メッセージを最も良く伝えることができるのではないか。しかも、摂食障害を通して、人間のパラドックス性を痛切

に体験した人々だからこそ、こうしたメッセージが有効であり、かつ、切実に必要とされるのだ。

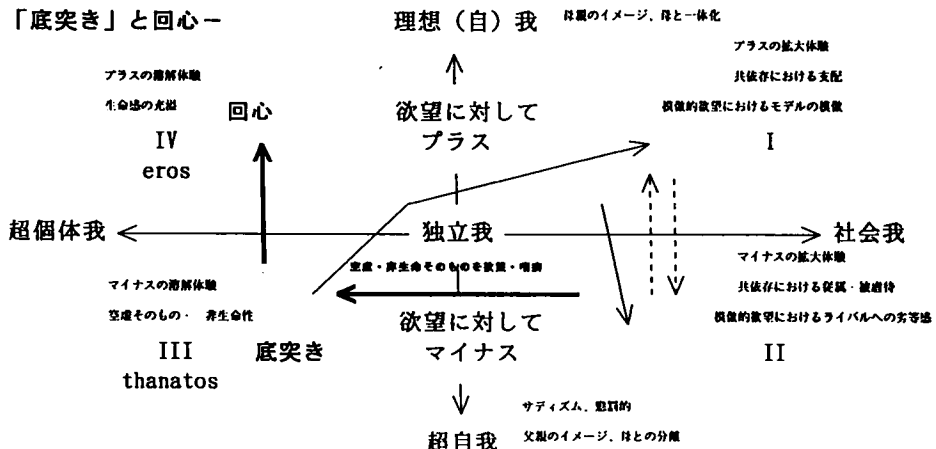
自助グループとは、一人一人の物語に耳を傾ける仲間がいて、仲間同士で回復・成長、自立を志向するメタ・メッセージが共有されている場、共同体である。その中で、自己の「物語 (narrative)」の語り直しの中、メンバーは、嗜癖的な自分いじめのエネルギー（模倣的欲望）に、「生命性」の光を垣間見、「今、ここに存在している自分」を語れるようになっていくのだ<sup>27)</sup>。

最後に、修士論文執筆時以来、私をAC (adult children) 本人としてミーティング、ワークショップに参加させて下さるなど、研究という枠を越えて私を支えて下さった、NABAのスタッフ、仲間の方々に深く感謝し、そして、摂食障害者本人だけでなく、家族、関係者、専門家にも開かれたネットワーク作りを進めるNABAの方々に深く敬意を表して、本稿を閉じることにしたい。

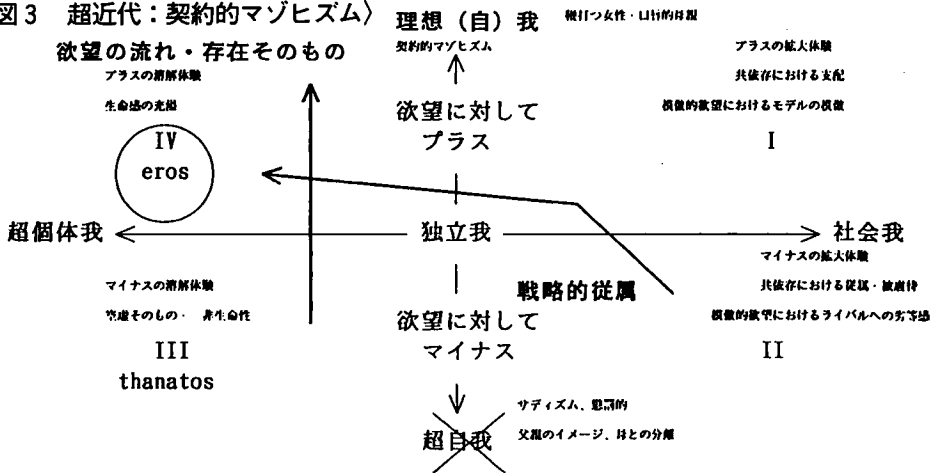
〈図1 近代：非生命性と依存的マゾヒズム・共依存〉



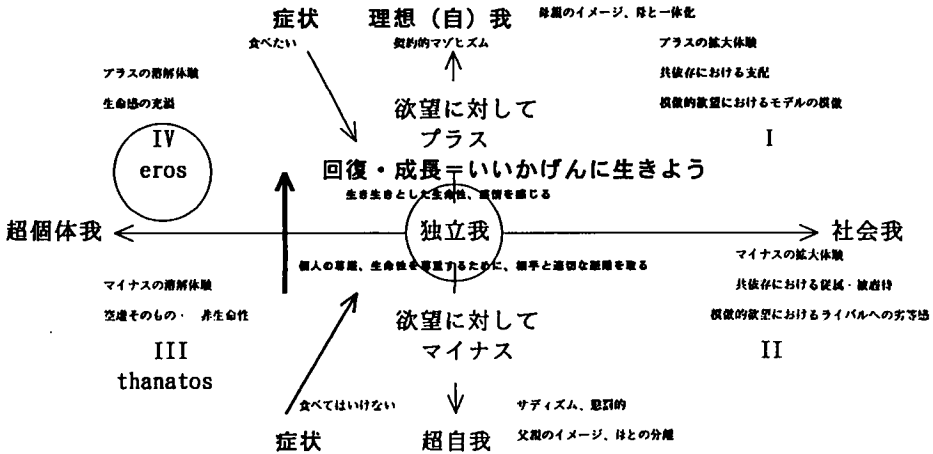
〈図2 近代の限界〉  
—「底突き」と回心—



〈図3 超近代：契約的マゾヒズム〉



〈図4 近代と超近代の狭間から生命性ある個人の時代へ：摂食障害からの回復・成長〉



〈表5 AAの12ステップ〉

- 1 われわれはアルコールに対して無力であり、生きていくことがどうにもならなくなったことを認めた。
- 2 われわれは自分より偉大な力が、われわれを正気に戻してくれると信じるようになった。
- 3 われわれの意志といのちの方向を変え、自分で理解している神、ハイヤー・パワーの配慮にゆだねる決心をした。
- 4 探し求め、恐れることなく、生き方の棚卸表を作った。
- 5 神に対し、自分自身に対し、もう一人の人間に対し、自分の誤りの正確な本質を認めた。



- 6 これらの性格上の欠点をすべて取り除くことを神にゆだねる心の準備が、完全にできた。
- 7 自分の短所を変えて下さい、と謙虚に神に求めた。
- 8 われわれが傷つけたすべての人の表を作り、そのすべての人たちに埋め合わせをする気持になった。
- 9 その人たち、または他の人びとを傷つけない限り、機会あるたびに直接埋め合わせをした。
- 10 自分の生き方の棚卸しを実行し続け、誤った時は直ちに認めた。
- 11 自分で理解している神との意識的触れ合いを深めるために、神の意志を知り、それだけを行っていく力を、祈りと黙想によって求めた。
- 12 これらのステップを経た結果、霊的に目覚め、この話をアルコール中毒者に伝え、また自分のあらゆることに、この原理を実践するように努力した。

〈表6 AAの12伝統〉

- 1 第一にすべきは全体の福利である。個人の回復はAAの一体性にかかっている。
- 2 われわれのグループの目的のための最終的権威はただ一つ、グループの良心の中に自分を現わされる愛なる神である。われわれのリーダーは奉仕を委された僕にすぎず、彼らは決して支配しない。
- 3 AAのメンバーであるために要求される唯一のことは、酒をやめたいという願望だけである。
- 4 各グループは完全に自律的でなければならない。ただし、他のグループまたはAA全体に影響をおよぼす事柄においてはこの限りではない。
- 5 各グループの主要目的はただ一つ、まだ苦しんでいるアルコール中毒者にメッセージを運ぶことである。
- 6 AAグループではいかなる関係ある施設にも、外部の企業に対しても、保証や融資やAAの名前を貸すことをしてはならない。金銭や所有権や名声の問題が、われわれを大事な目的からそれさせる恐れがあるからである。
- 7 すべてのAAグループは外部からの寄付を辞退して、自立しなければならない。
- 8 AAはどこまでも非職業的でなければならない。しかし、サービス・センターのようなどころでは専従の職員をおくことができる。
- 9 AAそのものは決して組織化されてはならない。しかし、サービスの機関または委員会をつくることはできる。これらの機関は、グループやメンバーからの付託に直接応えるものである。

- 10 AAは外部の問題には意見を持たない。したがって、AAの名は公の論争でひき合いに出されるべきでない。
- 11 われわれの広報活動は宣伝により促進することよりも、ひきつける魅力に基づく。新聞・電波・映画の分野で、われわれはいつも個人名を伏せるべきである。
- 12 無名であることは、われわれの伝統全体の霊的基礎である。それは各個人よりもAAの原理が優先すべきことを、いつも、われわれに思い起させるものである。

〈表7 NABAの「過食・拒食症者が回復し、成長するための10ステップ」〉

(NABA=Nippon Anorexia Bulimia Association)

日本アノレキシア(拒食症)・プリミア(過食症)協会 (1987年～)

- 1 私たちは痩せることへのこだわりから離れられず、この執着のために日々の生活がままならなくなっていることを認めた。
- 2 痩せることへの執着は、他人の評価を気にし過ぎるところからはじまり、自分の意志の力を信じ過ぎたことでひどくなったことを理解した。
- 3 今までの生き方を支えてきた意志の力への信仰をやめ、他人の評価を恐れることなく、あるがままの自分の心と身体を受け入れようと決心した。
- 4 あるがままの自分を発見するために今までの生き方を点検し、両親との関係から始まる人間関係についての点検表をつくった。
- 5 上記の点検表を、先を行く仲間に見せて語りあい、真の自己の発見につとめた。
- 6 偽りの自己の衣装の下に隠れていた、真の自己の存在を実感できるようになり、この“もうひとりの自分”と和解しようと思うようになった。
- 7 今までの生き方の誤りが、真の自己を見失い、傷つけ、成長の最後の段階を踏みそこなったことに由来することに気づいた。
- 8 自分の生き方の点検を続け、新たに気づいた無理な生き方は勇気をもって変えることを心がけた。
- 9 自分の命の自然な流れを実感できるようになり、その流れに漂うことの落ちつきを楽しむようになった。
- 10 これら自分の経てきた成長のステップを、まだ痩せることの努力に溺れている人々に正確に伝えた。

(10ステップ作成者：齊藤学)

## 注

- 1) 本稿においては、(欲望の)主体というときは、「欲望の持ち主」という意味であるが、「主体」と表記した時は、「近代の自律的主体」のことを表す。
- 2) デュビュイは、「主体は根底的な不充足を理由に自己を軽蔑するが、しかしそれは神のような完全な自己充足が到達可能であると信じているからである」(デュビュイ 1979=1990、89頁)と述べる。
- 3) 嗜癖とは、「衝動強迫的に没頭する様式化された習慣であり、中断した場合手に負えない不安感を生じさせるもの」(ギデンス、1992=1995、109頁)と定義できる。
- 4) シェフ、1987=1993、訳書xi-xii頁(監訳者 斎藤学、前書き)。
- 5) 野口、1988a。亀山、1988参照。
- 6) ドゥルーズ、1967=1973。作田、1996参照。
- 7) 「道徳的無感動」はカントの言葉。ラカンなど、多くの人がカントとサドの関係を論じている。
- 8) ここで言う、自己の意味づけをする規範は、近代的「主体性」「自律性」の規範のことと捉えたい。
- 9) オーバックの言う「偽りの身体」とは、ウィニコットの「偽りの自己」をもとにした概念である。
- 10) 渡辺公三、1990参照。
- 11) 拒食者は、実際に、他者から食べ物を食べさせらるることに「抵抗」する。それは、「自分の体は自分で支配したい。他人からコントロールされたくない」からであるとともに、拒食の苦痛によって体感している<個>の自覚を損なわれたくないからであろう。また、「痩せれば他人に受け入れられる」といっても、限度を超えて過剰に痩せた身体を、他人は、そうそう受け入れられるわけではない。つまり、過剰に痩せた身体は、「他者の目」に対する「抵抗」である。そして、同時に、「私を助けて」という訴えでもある。「痩せた身体」は、それ自体、他者に対する、ダブル・バインド的なメッセージである。
- 12) ザッヘル=マゾッホ (1836-95)。代表作に、「毛皮を着たヴィーナス」がある。マゾッホが、ガリチア地方という、西欧と東欧の境界の出身であるのは興味深い。スラヴの神秘宗教には、女性=自然への畏怖の感情に基づき、女性に神性を与えているものがある。(種村、1978)
- 13) こうした女性をドゥルーズは、「口唇の母親」と呼ぶ。それは、官能に身を任す「子宮の母親」とサディスティックな「エディプスの母親」の間である。
- 14) マゾヒズムにおけるピアッシング、身体の諸器官の縫合は、身体における差異を消滅させることである。(ドゥルーズ=ガタリ、1980=1994、174頁)
- 15) 現実的に言えば、性的マゾヒズムには、嗜癖としての側面もある。しかし、ここでは、特に「契約」という点に焦点を当て、ドゥルーズに従った記述をした。
- 16) ジラールは、キリストの超越性と、(サディスティックな)暴力的な神の超越性を区別している。前者は、暴力的超越性を越えた、愛の「超超越性」とも呼ばれる。(ジラール、1978=1984)
- 17) ベイトソンは、アルコール依存症者の競合的人間関係を「対称的關係」と呼ぶ。それが、回心(学習Ⅲ)によって「相補的關係」、つまり、自分が大きなシステムの一部であることを知るような関係に転換するという。(ベイトソン、1972=1987 下、参照)
- 18) AAの“Alcoholics Anonymous”には、突然の革命的体験としての「霊的体験」の事例がいくつか載せられているが、アルコール依存症者のほとんどの霊的体験は、W. ジェイムズの言う、「教育的変化」であり、それは、ゆっくりと実現するものであるという。(AA J. S. O、1979、362-363頁)
- 19) ベイトソンは、AAの<力>=ハイヤー・パワーとAAメンバーの関係が、AAの社会構造を映し出す、つまり、AAのシステムが全体としてデュルケーム的宗教を体現しているのだと言っている

(ベイトソン、1972=1987、下476頁)。しかし、ハイヤー・パワーをデュルケーム的意味での「神」として捉えることに関しては別稿にて論じたい。

- 20) 超個体我の溶解体験、主客未分状態は、「前自我」の主客未分状態とは区別されるものである。前自我とは、個体が独立我になる前の、胎児が母の胎内で母体と一体化していた状態である。この段階では、世界が非常に自分中心的に構成されており（第一次自分中心性）、あらゆる客体は、「自分の欲求を満たすか否かとか、あるいは、快感をもたらすか不快感をもたらすかとか、そういう観点から主体に関心をいだかせるだけ」であり、「客体というものがそれ自体独立の存在としてもつ意味は、まだここではとらえられていない」（作田、1995、12頁）のである。段階論的な説明になるが、超個体我の溶解体験は、第二次自分中心性という、客体を利用し操作する関心、自分の必要を満たすために他者に依存し合う状態——社会我といってよいただろう——を、さらに超えたものといえる。第二次自分中心性を超えた段階に、他者に依存しない純粹自立性、第三次自分中心性が想定できるが、これは、特定の他者や集団から自立し、自然や宇宙に溶け込む「理想自我」とも言い換えられよう。溶解体験は、第二次自分中心性と第三次自分中心性の両方の力にはさまれて生じた第二次対象中心性と呼べるものである。（作田、1995、26-28頁）
- 21) タナトスに関しては、フロイト以来、多くの論者が語ってきたが、ここでは、作田啓一の『三次元の人間』（1995）におけるエロス・タナトス論を用いる。「生成の社会学をめざして」（1993）には、まだ、溶解体験としてのタナトスの概念はなかった。
- 22) 第Ⅰ、Ⅱ象限は「第Ⅳ、Ⅲ象限のイミテーション」のようなもので（作田、1995、138頁）、「個人的には習慣、社会的には制度、慣習」を意味する（同、146頁）のだとされている。
- 23) L. ウォーカーは、夫から妻への暴力に関して、「暴力の三相サイクル説」を提唱する。それは、「夫婦間の緊張（緊張上昇期）→暴力による緊張解放（暴力発現期）→（妻に対する）愛による癒し（悔恨期）」のサイクルである。しかし、暴力がエスカレートしてくると、悔恨期はなくなるのである。（Walker、1984）
- 24) 対人関係におけるダブル・バインド（ベイトソン）と超個体我（溶解志向）の関係については、作田、1995、99-103頁参照。
- 25) 本稿における「自律」は、「非依存的状态」、「自己依拠」と言い換えてもよく、しかも、強迫的な意味合いを帯びる。一方、「自立」は、「ひとりで居られること」という意味合いである。比較するなら、前者は“doing”のレベルでの概念で、後者は“being”のレベルでの概念である。
- 26) 岡崎宏樹は、バタイユの供犠論における供犠の高揚感を溶解体験だと見做している。（岡崎、1995）
- 27) そもそも、嗜癖的な高揚感、陶醉感の追及は、生命性ある溶解体験への欲求からなされるものではないか。「アルコールへの渴望は、ある霊的な渇きの低い水準の表現でした。その渇きとは、われわれの存在の一体性 wholeness にたいする渇きであり、中性風の言い方をすれば、神との一体化ということであった」（斎藤、1998、76頁）と、ユングは言う。

## 参考文献

- AA J. S. O., 1979, *Alcoholics Anonymous* 無名のアルコール中毒者たち  
 Baumeister, R. F., 1991, *ESCAPING THE SELF Alcoholism, Spirituality, Masochism, and Other Flights from the Burden of selfhood*, BasicBooks  
 Bataille, G., 1968, Documents, MERCURE de FRANCE (*DOCUMENTS et LA CRITIQUE SOCIALE=ŒUVRE COMPLÈTE DE GERGES BATAILLE Tome 1*)  
 =1974、片山正樹訳、「ドキュマン」、二見書房

- Bateson, G., 1972, *STEPS TO AN ECOLOGY OF MIND*, Harper & Row, Publishers Inc.  
 =1986、1987、佐伯泰樹、佐藤良明、高橋和久訳、【精神の生態学(上)(下)】思索社
- Bepko, C. (Edt.), 1991, *Feminism and ADDICTION*, The Haworth Press, Inc.  
 =1997、斎藤学訳、【フェミニズムとアディクション - 共依存セラピーを見直す-】、日本評論社
- Crisp, A. H., 1980, *ANOREXIA NERVOSA-LET ME BE-*, Academic Press Inc.  
 =1985、高木隆郎、石坂好樹訳、【思春期やせ症の世界】、紀伊國屋書店
- Deleuze, G., 1967, *Présentation de Sacher-Masoch: Le froid et le cruel*, Minuit.  
 =1973、蓮實重彦訳、【マゾッホとサド】、晶文社
- Deleuze, G./Guattari, F., 1980, *Mille Plateaux-Capitalizum et Schizophrénie*, Les Editions de Minuit  
 =1994、宇野封一、小沢秋広、田中敏彦、豊崎光一、宮林寛、守中高明訳、【千のプラトー - 資本主義と分裂症-】、河出書房新社
- Dumouchel, P/Dupuy, J-P., 1979, *L'ENFER DES CHOSES*, Editions du Seuil  
 =1990、織田年和、富永茂樹訳、【物の地獄】、法政大学出版局
- Freud, S., 1924, *Das ökonomische Problem des Masochismus*  
 =1970、青木宏之訳、【マゾヒズムの経済問題】、【フロイト著作集6】、人文書院
- Giddens, A., 1991, *Modernity and self-identity: self and society in the late modern age*, Stanford University Press.  
 ——1993, *The Transformation of Intimacy; Sexuality, Love, and Eroticism in Modern Societies*, Stanford University Press  
 =1995、松尾精文・松川昭子訳、【親密性の変容 - 近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム-】、而立書房
- Girard, R., 1961, *Mensonge romantique et vérité romanesque*, Éd. Bernard Grasset  
 =1971、古田幸男訳、【欲望の現象学】、法政大学出版局  
 ——1972, *La violence et la sacré*, Bernard Grasset.  
 =1982、古田幸男訳、【暴力と聖なるもの】、法政大学出版局  
 ——1978, *Des choses cachées depuis la fondation du monde*, Éd. Grasset & Fasquelle.  
 =1984、小池健男訳、【世の初めから隠されていること】、法政大学出版局
- Halperin, D. M., 1995, *Saint Foucault: Towards a Gay Hagiography*, translated by arrangement with Oxford University Press, Inc.  
 =1997、村山敏勝訳、【聖フォーコー - ゲイの聖人伝に向けて-】、太田出版
- Horkheimer, M and Adorno, T. W., 1947, *DIALEKTIK DER AUFKLÄRUNG Philosophische Fragmente*, Querido Verlag, Amsterdam  
 =1990、徳永恂訳、【啓蒙の弁証法 - 哲学的断想-】、岩波書店
- James, W., 1901-02, *The Varieties of Religious Experience. A Study in Human Nature*, Longmans, Green, and Co, Thirty-Second Impression(1920)  
 =1969-70、梶田啓三郎訳、【宗教的経験の諸相(上)(下)】、岩波書店
- Norwood, R., 1985, *WOMEN WHO LOVE TOO MUCH*, Jeremy P. Tarchar, Inc., Los Angels  
 =1988、落合恵子訳、【愛しすぎる女たち】、読売新聞社
- Orbach, S., 1986, *HUNGER STRIKE. The Anorectic's Struggle as a Metaphor for Our Age*, W. W. Norton & Company, Inc., New York.  
 =1992、【拒食症 - 女たちの誇り高い抗議と苦悩-】、鈴木二郎他訳、新曜社
- Reik, T., 1941, Translated by Margaret H. Beigel and Gertrud M. Kurth *MASOCHISM*

- IN MODERN MAN*, FARRA, STRAUS and COMPANY, New York.
- Leopold von Sacher-Masoch, 1871, *Venus im Pelz*  
=1976、種村季弘訳、『毛皮を着たヴィーナス』、桃源社
- Schaef, A. W., 1986, *Co-dependence; misunderstood-mistreated*, Harper & Row Publishers, San Francisco
- 1989, *Escape from Intimacy*, Harper & Row New York
- 1987, *WHEN SOCIETY BECOMES AN ADDICT*, (Japanese translation rights arranged with Lazear Agency)  
=1993、斎藤学監訳、『嗜癖する社会』、誠信書房
- Walker, L. E., 1984, *The Battered Woman Syndrome*. Springer series:Focus on Woman. Volume 6, Spinger Publishing Company, New York
- Weber, M., 1904-05, *Die protestantische Ethik und > Geist <des Kapitalismus*.  
=1965、阿部行蔵訳、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、『ウェーバー政治・社会論集』、河出書房
- 浅田彰、1985、『ダブル・バインドを超えて』、南想社
- 伊藤公雄、1993、『<男らしさ>のゆくえ—男性文化の比較社会学—』、新曜社
- 大澤真幸、1990-1992、『身体の比較社会学』I・II、勁草書房
- 、1991、『ジェラシーとはなにか』、『思想の科学 No.140 羨望と嫉妬の研究』、思想の科学社
- 岡崎宏樹、1995、『交流の共同体と合一の共同体——バタイユとジラールの供犠論の比較から——』、『ソシオロジ』第39巻、第3号、社会学研究会
- 織田年和、1990、『回心と溶解体験—神秘体験の社会的分析のために—』、『京都産業大学論集』第19巻 第2号
- 、1991、『羨望と差異化』、『思想の科学 No.140 羨望と嫉妬の研究』、思想の科学社
- 亀山佳明、1988、『自己変容のコミュニケーション—G. ペイトソン・ノート—』、『香川大学一般教育研究 第33号』、1988年3月、香川大学一般教育学部
- 斎藤学、1989、『家族依存症—仕事中毒から過食まで—』、誠信書房
- 、1993、『生きるのが怖い少女たち—過食・拒食の病理をさぐる—』、光文社
- 、1995a、『共依存とみえない虐待』、『こころの科学』59、日本評論社
- 、1995b、『魂の家族を求めて—私のセルフヘルプ・グループ論—』
- 、1996、『カルトと自助グループ』、『アルコール依存とアディクション Vol.13 No. 3』、家族機能研究所
- 、1997、『「自分のために生きていける」ということ —寂しくて退屈な人たちへ—』、大和書房
- 作田啓一、1976、『近代化とニヒリズム』、猪野謙二他 編、『岩波講座 文学 11 現代世界の文学 1』、岩波書店
- 、1980、『ロマン主義を超えて—社会学の三つの問題—』、大江健三郎他 編、『叢書 文化の現在 11 欲ばしき学問』、岩波書店
- 、1981、『個人主義の運命—近代小説と社会学—』、岩波書店
- 、1988、『ドストエフスキーの世界』、築摩書房
- 、1991、『嫉妬・羨望・憧憬』、『思想の科学 No.140 羨望と嫉妬の研究』、思想の科学社
- 、1993、『生成の社会学をめざして』、有斐閣
- 、1995、『三次元の間人—生成の思想を語る—』、行路社

- 、1996、『一語の辞典 個人』、三省堂
- 種村季弘、1978、『ザッヘル＝マゾッホの世界』、桃源社
- 塚本嘉壽、1994、『タンタロス・コンプレックス—否定性の深層心理—』、行路社。
- NABA、1996、『いいかげんに生きよう 過食・拒食は私たちのメッセージだった』
- 中島道男、1993、『デュルケムと＜制度＞理論』、『社会学雑誌』第10号
- 野口裕二、1995、『共依存の社会学』、『こころの科学』59、日本評論社
- 、1996、『アルコールリズムの社会学 —アディクションと近代—』、日本評論社
- 長谷正人、1991、『悪循環の現象学—「行為の意図せざる結果」をめぐって—』、ハーベスト社
- 、1993、『「主体」のパラドックスと「遅れ」の意識—近代の時間意識をめぐる—考察—』、『ソシオロジ』116、社会学研究会
- 馬場謙一編、1986、『現代のエスプリ 232 思春期の拒食症と過食症』、至文堂
- 藤山正三郎、1990、『イニシエーションとしての思春期の病い—＜思春期やせ症＞の事例から—』、  
波平恵美子編著、『病むことの文化—医療人類学のフロンティア—』、海鳴社
- 渡辺恒三、1990、『森と器』、波平恵美子編著、『病むことの文化—医療人類学のフロンティア—』、  
海鳴社

with workers' collective mentality.

The sociological study on the Japanese modern industrial labor world with the use of the historical and positive point of view can be considered as valid to realize the way of life and thought of workers in our modern society through the seize of relations they had in their everyday-work.

## **From Self-defeat and Dependence to Independence: The Paradox of Compulsive Autonomy in the Modern Society**

Toshinari KAMBARA

The norm of modern society is "autonomy", "self-control". But it causes self-defeat and dependence. R. Girard says that the desire for autonomy is the imitation of another's. The superiority of the "model=rival" is the evidence of the worth of his or her desire. So, by connecting masochistic and dependent relationship, he or she makes sure of his or her pride. Addiction (codependence, alcoholism etc) is such self-defeating behavior. And addictive behavior orients "nonlife". Modern rationalism itself denies "nature" and "life".

But such modern compulsive norm contains the possibility of its destruction. For example, eating disorder is both the typical phenomenon of modernity (the norm of "self-control") and the "resistance" to it. And sexual masochism of men is the defeat of the norm of autonomy.

When addictive or codependent person confronts "nonlife", or "hits the bottom", he or she can feel "life felt". The members of AA (Alcoholics Anonymous) surrender themselves to the God (the Higher Power), and they become free from their burden of "will power". So they can be in sympathy with other members. And AA itself makes efforts not to be spoilt by codependent relationship and wholism.

But we can't completely be free from codependent relationship or wholism. And we shouldn't be lost in the "ecstasy" of sympathetic feeling. Recognising such things, we can live not compulsive lives, and we can feel our natural "life felt" and



sympathy with others. NABA\* (self help group of eating disorders) suggests us "*iikagen-ni-ikiyou*". When our selves are independent, we can live such the way of life.

In this article, I try to describe the transformation of self in the modern society and independence of the self, using Keiichi Sakuta's theory of self. He says the self has three phases: "independent self", "social self", "transpersonal self". I think "social self" makes codependent relationship and wholism, and "transpersonal self" experiences "ecstasy", "life felt". In such ecstasy, one feels that there's no boundary between his or her self and others'. One of the aims of this article is to show the meaning of "transpersonal self" in the modern society.

\*NABA=Nippon Anorexia Bulimia Association

## **Modernism and Perennialism in the study of Nation-States**

Akihiro NOMURA

The purpose of this article is to clarify the differences of two major approaches in the study of nation-states and nationalism--a modernist approach and a perennialist approach. The modernist approach, which is a dominant and fashionable paradigm in the study of nation-states and nationalism today, holds that nations and national identities were invented by the intelligentsia in the process of modernization which brought about the dynamic change of social structures. This perspective emphasizes that nations are a modern phenomenon, which is mainly produced by numerous modern dimensions of social and cultural change caused by industrialism, capitalism, bureaucracy and secularism. As argued by modernists like E. Gellner, B. Anderson and E. Hobsbawm, only in the era of modernization was there any possibility of unifying disparate populations.

In contrast to what modernists argued, people in daily life tend to believe their roots of national identities simply because they are originated from pre-modern past. That is, people treat nationality as somehow naturally given. In most conflict, people claim their rights of self-determination on territory, law, economy and education referring